



西南暖地において、イタリアンライグラスは、主に肉用牛繁殖経営における冬季の自給粗飼料として広く栽培されています。また、同草種とエン麦との混播は、単播に比べ、乾物収量が増加するとの報告もあり、飼料増産のカギを握っています。しかし、晩夏時期（8月下旬～9月上旬）の播種は、いもち病による立ち枯れ発生などにより、現場で敬遠される傾向がみられます。

こうした中、農研機構九州沖縄農業研究センターが育成したイタリアンライグラスの極早生品種「Kyushu 1」は、いもち病に強い抵抗性があります。そこで、同時期に、新品種「Kyushu 1」と従来品

イタリアンライグラス新品種

エン麦と混播で増収 強いいもち病抵抗性

種「さちあおば」を用いて、エン麦との混播による栽培試験を行いました。
この結果、「Kyushu 1」は、「さちあおば」に比

べ、いもち病の発生が見られず、春1番草までの合計収量についても、2割程度の増収となる傾向にありました（表）。

イタリアンライグラスの品種の違いといもち病発生程度および収量性

イタリアンライグラス ³⁾	いもち病発生程度	乾物収量(キロ/㍏) ¹⁾				
		年内草			春1番草	合計
		イタリアン	エン麦 ²⁾	雑草		
Kyushu1	無	19.6	40.2	7.2	57.8	124.8
さちあおば	若干発生	13.2	38.0	6.5	47.6	105.2

1) 2015～17年の平均 2) エン麦の品種はウルトラハヤテ草駄天
3) 播種は9月上旬、年内草の収穫は12月上旬、春一番草は3月下旬～4月中旬

度から種子の利用が可能となったことから、今後、冬季の安定的な飼料生産と飼料自給率の向上に大きく期待されます。
（長崎県農林技術開発センター 畜産研究部門 大家畜研究室 研究員・塩屋ちひろ）